広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Agentivityについて
Author(s)	岸, 順子
Citation	ニダバ , 7 : 31 - 37
Issue Date	1978-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050983
Right	
Relation	

Agentivity について

岸　　順　子

D. A. Cruseは，" Some thoughts on agentivity "（Journal of Linguistics 9，1973，P.11－23）において，agentivityという概念が学者間で確定していないのに着目し，その批判的研究によって，agentivityを明確に定義づけようと試みている。これからこの論文を紹介し，それに批判を加えることによって，agentivityについての考察を深めたいと思う。

Cruseはまず序論において，従来のagentivityに関する論文を二つのタイプに分けた。まず第一に，agentivityを指示的な術語で定義しようとするタイプ，第二に，それを表層構造の語彙項目doの意味に関係づけるタイプで，純粋に言語学的な定義である。第一のタイプにはFillmore，Gruber の定義が含まれる。Cruseはこの二人の定義が不十分で曖昧であるのは，指示的な術語で言語学的意味を扱おうとすることの当然の結果であると考え，二番目の態度を支持している。

本論で彼はこの二番目の態度に基づいて議論を展開し，はじめにagentivityとdoings との相関性を客観的に考察し，次にこの二つが厳密に一致するものであるかどうかを論じ，さらにdoersに関わる素性の下位区分を行っている。これらについて述べる前にCruseは，従来agentive case（Fillmore），agentive verbs（Gruber），agentive nouns（Lyons，Anderson）などさまざまな術語が使われているが，agentiveとは名詞や動詞に限定されるものではなく，Halliday のいうように関係の素性であって，それは動詞と名詞の間にあるということを強調している。(注1) 但し彼は便宜上，agentive nounsという術語は保持し，議論を進めている。Cruseは周知のこととして説明を与えていないが，本題に入る前提として，agentiveとはいかなるものであるか，それがどうしてdoに関係づけられるかについて述べたい。

Halliday によれば，agentiveに関係するとされる動詞は，行為節(注2)を作る動詞のみである。行為節とは，行為や出来事と関係しており，「行為者（agent＝agentive nouns）を内在的役割として含むものであって，do，happenを含む形式をもつ。心的過程を表わす節〔(a)知覚 see，look／(b)反応 like，please／(c)認識 believe，convince／(d)言語化 say，speak〕と関係表示節〔be，look，get，turn，keep，remain，seem，sound／equal，represent，resemble，stand for〕とが行為節と区別される。

行為節におけるdoとhappenの違いは，Chafeによって明確に示されている。(注3) doを含む形式をもつとは，「Nが何をしたか」という文（Nは名詞）の答えになることであって，do－文は，誰かがすること，すなわち活動とか動作を表わしている。

What did Harriet do ?　　She sang.

*She died.

それに対してhappen を含む形式をもつとは，「Nに何が起こったか」の答えになることであり，happen－文は過程を示す。すなわち，名詞が状態を変えたといえる。

What happened to Harriet ?　　She died.

*She sang.

do－文を作る動詞は動作動詞，happen－文を満たす動詞は過程動詞として規定される。過程動詞は受動者を，動作動詞は動作者を伴う。

これらの前提から，agentive nouns とは行為節のうち，do－文において示された動作の起こし手であることがはっきりした。そこで次に，Cruseの三つの論を紹介したい。

I　agentivityと"doings"との正確な関係づけ

ここで彼は，いかにしたら正確な診断上のテストができるかを考察している。彼の得たテストは，Halliday のテストに少し修正を加えたものである。「What happened to the vase was that it broke. は正しい。しかるに一方，?(注4) What the vase did was break. は何か奇妙で逸脱しており，正しくないということから，the vase broke はhappen－clauseであるといえる。」

テストのもう一つの可能な形は，質問と答えのつながりの関係の正常さを用いたものである。（たとえばAndersonによるもの）

A：What did John do ?　　B：He moved the table.

?A：What happened to John ?　　B：He moved the table.

上文が正しく下文が正しくないことから，John moved the table. の John は agentiveであると決定できる。

ここに至ってCruseは，これまでのテストが主語の位置にある名詞のagentivityのみに関するものであることに気づき，さらにagentive 目的語とnon-agentive 目的語とを区別するテストを考案した。do－testの役割はdoの下義関係にある動詞を選択することであることから，目的語の agentivity を判断するには，下義関係のためのより一般的な"含意"を使えばよいことがわかる。

John marched the prisoners. は The prisoners did something. を含意する。

John shot the prisoners. は The prisoners did something. を含意しない。

これで，agentiveが存在するか否かを判断する基準となるdo－testが確立できた。しかしながらChafeが言っているように(注5)「このような方法は，大ざっぱな実用的な手引きであって"発見の手順"ではない。このような方法は必ずしも，いつも正確であるとは限らないし，問題のある事例に当って，まちがいのない決定をくだす基準になるとも限らない。」CruseはChafeのこの考えを極論としながらも，do－testに基礎づけられたagentivityの概念は，意味論的に異質のものであって，おそらくそれが最初にあらわれた時ほど重要でないと認めている。従って次には，do－testの結果得

られたものがどの程度agentivityから逸脱しているか，すなわち，do－testの妥当性を調べてみなければならない。

Ⅱ do－test の妥当性

Cruseは，agentivityに関して一般に受け入れられている意見を，do－testの妥当性を測る基準としている。

(1) (注5) agentive／non agentive の区別は，animate名詞のためにのみ，関係がある。

(2) dieのような過程動詞は，絶対にagentiveの解釈を許さない。

(3) 状態動詞は agentive 主語をもち得ない。

do－testはこれらの全てと矛盾する。

(1) Agentivity と animateness

明らかな矛盾は，自然のagentを示す名詞やある種の機械である

What the wind did was blow the tree down.

What the computer is doing is calculating the correlation coefficient.

が，これらの名詞は文法上animate名詞と分類され得る。しかし，ふつうの inanimate 名詞もdo－文 の主語であり得る。

What the bullet did was smash John's collar-bone.

Cruseはこれを，自然のagentを示す名詞やある種の機械と同様，inanimateの物も，自らの動作学的（あるいは他の）エネルギーによって，一時的なagentivityを得ることができるように思われると説明している。

またある状況において，inanimate主語をもつhappen－文が，do－文と中立化しているという興味深い事実を，Cruseが指摘している。すなわち，次のような自然に聞える連続体を作ることができる。

A：Why does the vase do that？　　B：What？

A：Keep falling off the shelf.

もちろんhappenをdoの代わりに用いることができる。しかしその結果は，どんな基礎的な方法によっても逸脱していないにもかかわらず，人工的に聞える。

(2) Process verbs

過程動詞はhappen－文 を作るはずであるが，次のような例外もある。

Christ died in order to save us from our sins.

What Christ did was die in order to save us from our sins.

？What happened to Christ was that he died in order to save us from our sins.

このように，たとえ過程動詞であっても，意志をもって状態の変化に身をまかせる場合はdo－文

になる。

(3) 状態動詞

状態動詞が大体において進行形になり得ないとLyonsやChafeは言っているが，Cruse はその反例を提示している。すなわち，行為と状態の両方の解釈をもつ stand，sit，lie は自由に進行形になり，それらは状態を指示しようと行為を指示しようと do－動詞である。

What John is doing is standing／sitting／lying in the middle of the room.

また進行形が不可能な例においてさえ，do－解釈は時折存在する。

What you must do is absent that day.

?You are being absent.

以上の三つの基準はどれも，doers が agentive nouns よりも広い概念であることを示している。状態動詞やその進行形（(3)）の主語が agentive でないのは，それが行為節ではないことから明らかであり，また意志を伴なった die（(2)），do と happenの中立化した状況における動詞((1))が agentive 主語をとり得ないのは，それらが動作動詞でないことから明らかである。ここで問題としなければならないのは，動作動詞の主語となる名詞と agentive nouns との間にどの程度のずれがあるか，換言すれば，doers には agentive 以外にどのような素性が関わっているかということである。これには，基準(1)の animateness が示唆的であると思われる。

Ⅱ doers に関わる素性の下位区分

Cruse は do－test の確かさ，妥当性について述べた後，まだ研究の途中の段階であると言いながら，少くとも四つの素性が doers に関与しているという試案を提出している。

(1) volitive：意志の行為が述べられたり意味されたりする時に存在する。

John drifted two miles further down the river.

John didn't eat anything for two days.

(2) effective：内的なエネルギー源によってではなく，その位置・運動などのために，何か力を与えるものに言及する。

These columns support the weight of the pediment.

The flying stone broke the window.

(3) initiative：命令を与えることによって行為を起こすこと。

The warder marched the prisoners across the yard.

John galloped the horse around the field.

(4) agentive：行為を行う時，自らのエネルギーを使っているとみなされるものによって遂行された行為を示す文に存在する。

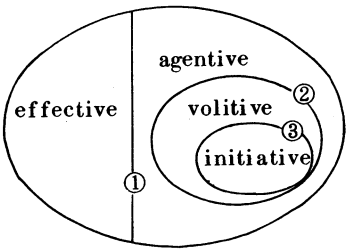
The fire rapidly spread (itself) through the building.

John moved (himself) to avoid the falling stones.

John flew the model aeroplane.

これらの素性への着眼は非常におもしろいが，残念ながらCruseは，これ以上問題を掘り下げようとはしていないので，doersとagentiveとの関係が今一つはっきりしない。そこで以下でCruseの考え方を展開させて，各々の素性間の関係を明らかにし，agentivityとは何であるかの，筆者なりの結論を出してみたい。

Cruseの提示した素性を整理して図示すると，次のようになると思われる。



①の境界線……動作のエネルギーの由来を区別する。affectiveは位置・運動エネルギーによるもの，agentiveは内的エネルギーによるもの。

②の境界線……意志のあるなしを区別する。枠内は意志あり，枠外は意志なし。

③の境界線……他のものの動作を引き起こすか否かを区別する。枠内は肯定，枠外は否定。

次に，この図をanimatenessをふまえて順番に詳しく見ていくことによって，理解を深めたい。①の境界線は，大ざっぱにanimateとinanimateを区別するが，多少のゆれはあるようである。たとえば，Cruseの示した文

John smashed the window (a) when he fell against it.

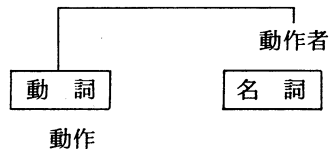
(b) with a stone.

を見てみると，(a)ではJohnはeffective素性をもち，(b)ではagentive（＋volitive）素性をもつ。このことから，たとえ動作をするのがanimate名詞であっても，その動作が意図的でない場合は，inanimate名詞と同じ価値をもつことがわかる。また逆に，inanimate名詞と動詞が結びついて意図された動作を示す時，（e. g. The stone broke the window.）この名詞はeffectiveとはなり得ず，instrumentalとなる。このことは，effectiveがvolitiveと結びつき得ないことを示す。agentiveの方には，animateだけでなく，自然，ある種の機械も含まれる。

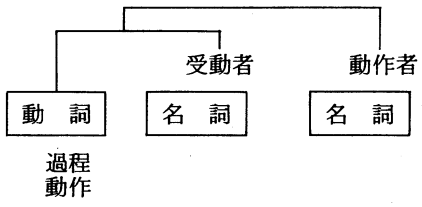
②の境界線は大ざっぱにanimate（意志あり），自然，ある種の機械（意志なし）を分ける。

③の境界線をひく基準となる素性を，Cruseは「命令を与えることによって行為をおこすこと」であって，Hallidayの行為の起こし手とは違うといっているが，彼はその違いを明記していない。そしてまた彼はJohn flew the hawk. John flew the model aeroplane. をagentiveの方に入れているが，この二文は，彼のいうinitiativeと何ら矛盾するところはないように思われる。

このinitiativeを考える上で，Chafeの意味配列(注7)が有用である。彼は六つの意味配列を提示しているが，そのうちagentiveに関係あるのは，



Harriet sang.



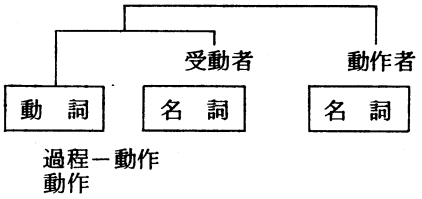
Michael dried the wood.

の二つだけである。二番目の意味配列で（過程動作）とあるのは，動詞が，過程動詞として名詞，すなわち受動者の状態の変化を表現し，動作動詞として，誰か，すなわち動作者のすることを表現することを意味する。

What did Michael do？　　He dried the wood.

What happened to the wood？　　Harriet broke it.

これにCruseの考案したagentive－non agentive 目的語を見分けるテストを加えると，Michael dried the wood.とJohn flew the model aeroplane.の意味配列が区別できる。



John flew the model aeroplane.

What did John do？　　He flew the model aeroplane.

What happened to the aeroplane？　　John flew it.

What did the aeroplane？　　It flew.

このような意味配列をもつ文の動作者，すなわち受動者がagentive の素性をもつ場合の動作主がinitiative であるといえる。

これで四つの素性の意味内容とそれぞれの関係がはっきりした。initiativeをもつものは必ずvolitive，agentive をももち，volitive をもつものは必ずagentive をももつ。effective は絶対にvolitive，initiative とは結びつかない。

次に学者間の意見の相違を見ていこう。一番範囲をせばめているのはGruberであって，彼はagentive は必ず意志を伴なうものであるとする。彼の in order toによる書き換え，副詞句（e. g. carefully, deriberately）による書き換えは，全て②の境界線の内側を選択する。もう一段階範囲を広げたのはFillmoreで，彼は①の境界線の右側をagentive であるとするが，instrumental と混同しているものも

あるようである。Cruseは，agentive の妥当性の所で述べたように，effectiveを一時的にagentiveの素性をもつものと考えて，純粋なagentiveと区別している。Chafeも，The rock broke the window. のrockは派生的に能力をもつ可能性がある(注8)として，Cruseと同じ立場をとっている。それに対してHallidayは，effectiveとagentiveの区別をせず，行為が故意になされたのではない場合の The window was broken by the ball. のballはagentであるとする。(注9) しかしながら，effectiveとagentiveとの間に境界線が現存することは，エネルギーの由来，意志の有無によって明らかであり，effective はやはり一時的，派生的なagentiveである。以上のことから，Cruseがagentiveと呼んだ素性を狭義のagentive（doers ＞ agentive nouns），agentiveとeffectiveを加えたものを広義のagentive（doers ＝ agentive nouns）とするのがよいと思われる。この二つの式を合成すると，doers ≧ agentive nounsが得られる。

ごく単純な素性だと思っていたagentiveでさえも，詳しく見ればこのように細かく区分されるし，また考察の及ばなかった境界線上の素性もあろう。各々の学者の主観から出発した判断の基準が少しずつ食い違っているのも無理はないと思われるが，意見が出そろったところで，各々の基準を客観的に明らかにし，統一化の方向に向かうべきであろう。この意味において，Cruseの論文は，たとえ主観から完全に脱却できなかったにせよ，価値あるものといえる。

（注1）　Fillmore の格の概念も，本質的には類似しているように思われる。（Cruse注）

（注2）　M.A.K. Halliday「言語構造と言語機能」（J．ライオンズ編著「現代の言語学（上）」大修館書店，1973）P. 207－214

（注3）　W.L.Chafe「意味と言語構造」，（大修館書店，1974）P. 102－103

（注4）　Cruseにならない。明らかに正常でない形を示すのに，"？"を用いることにする。

（注5）　同（注3）P. 101

（注6）　これらは全て，Lyons，Introduction to theoretical linguistics. Cambridge：The University Press，1968に示されているか，あるいはそこから推論できる。（Cruse注）

（注7）　同（注3）P. 108

（注8）　同（注3）P. 171

（注9）　同（注2）P. 201